

# 國學院大學學術情報リポジトリ

Articles : Kaiguang 開光 Ritual Conducted in  
Tainan Taoism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Asano, Haruji メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000057">https://doi.org/10.57529/00000057</a>

# 台南道教の開光儀について

浅野春二

## 序

「開光」<sup>①</sup>は「開光点眼」とも称し、神像・魂身（死者を象つた人形）等に靈魂（神靈・亡魂等）を入れる呪術的儀礼とされる。わが国で行われる「開眼」と同様のものである。この儀礼の方式には様々なものがあるが、小稿では、台湾南部・台南地区の道士（烏頭道士）<sup>②</sup>が、醮や斎（功德）に際して行う「開光」について若干の考察を行いたい。

筆者は一九八〇年以来、台南市の陳榮盛道長の行う儀礼につ

いて調査してきたが、陳榮盛道長の使用する主要な儀礼のテキスト（経・懺・科儀等）については、大淵忍爾氏の『中国人の宗教儀礼』<sup>③</sup>に収められている。これには、録文とともに陳榮盛道長からの聞き取り調査に基づく解説が付されている。神像の「開光」については『開光科儀』（三六八頁以下）に、魂身の「開光」については『開通冥路科儀』の初めの部分（四七三頁）にある。また、副薦等の魂身の「開光」については『引魂科儀』（五六六頁）にある。その他に「神主の開光」（四七一頁以下）、打城に用いる城（枉死城）の「替身」等の「開光」（五〇二頁）がある。これらによって、眼・耳・鼻・口等を「開

く」ことや、靈魂を入れる（憑依させる）ことについて、どのような觀念やイメージが働いているのかを考えてみたい。

### 一、「開光科儀」

「開光」の手順については、台南の陳道長の儀礼だけでも、細部はそれぞれで異なっているが、基本的な内容については、概ね類似したものといえる。ここでは、醮儀に用いられる「開光科儀」を例にして簡単に紹介したい。

まず、道士が「歩虚」を歌う。「虚」すなわち空中を歩む境地を歌った歌であるが、現代台湾の儀礼では、儀礼の初めに歌う歌として用いられている。

次に「浄壇」。道士が「三浄呪」「浄天地神呪」を歌いつつ、花のつぼみ等を使って水盂中の符水を振りまき、壇（儀礼空間）を清める。

次に「香白」を唱えつつ、線香を香炉に供える。

次に「啓聖」。神々の名前を唱えて、神々を呼び出す。

この後が「開光」の独自の内容となる。

某位神明（開光すべき神名）、扶助金身、點開慧眼、萬年

顯赫 恭望<sup>7</sup>／眾眞、洞回照鑒。（三三八頁）

某位神明よ、金身を扶助し、點じて慧眼を開かば、萬年顯赫たり。恭んで望むらくは、眾眞、洞回照鑒せんことを。

ここで「勅雞」を行う。雞に対して命じるのである。

祖師爲吾來勅雞、本師爲吾來勅雞、此雞非凡雞、乃天上金烏雞、靈雞本宿在堂中、與吾取來手中藏寶劍、此出眞精血、指點慧眼、便開光。（三三八頁）

祖師よ吾が爲に來たりて雞を勅せ。本師よ吾が爲に來たりて雞を勅せ。此の雞は凡なる雞に非ず。乃ち天上の金烏雞なり。靈雞の本宿（？）は堂中に在り。吾と與に取りて來たり、手中に寶劍を藏し、此に眞精血を出し、指して慧眼を點じ、便ち開光せん。

次には、大淵氏の解説を引用する。

そこで白鷄（太陽の中に居る金烏鷄は文字とは異なって白鷄と觀念される）のとさかを劍<sup>5</sup>で切つて血を出す。白鷄の血は即ち太陽の精氣を象徴する。そして朱筆に血をつけて

依頼者（醮主等）の氣を取り（開けた口の所へ筆を持って行き、息を出さず）、出外<sup>11</sup>して筆を太陽（夜は月）に向け、太陽（月）の光華を取り（筆で空中に丸を畫いて中に點をする動作）、次に丸い新しい鏡<sup>12</sup>を太陽の方へ向け（夜間は月に向ける）、鏡の上に三台と靈字と罡の印しとを書く。靈字を書く時は一畫毎に二十八宿の名を誦える（即ち二十八畫に書く。なお、三台と靈字と罡とは實際は出外する前に豫め書いて置き、その上をなぞるのである）。太陽（或は月乃至自然）の精氣を完全に鏡に取り込む譯である。そして鏡の前で金古紙<sup>13</sup>を燃して清め、中に入れて鏡を像の方へ向け、次の呪をとなえる。像は醮主が持つ。（三六八〜三六九頁）

次の呪文を唱えながら、神像に朱点を打つていく。この時に道士は、左手に鏡を持って神像に向け、右手に筆を持って点を打つていく。神像が複数ある場合は、朱点を置く際に唱える部分を繰り返す。

天色清、地色靈、啓告皇天作證盟、手執兔毛筆、如今開光點眼、爲第一甕左眼寫、右眼寫甕、點靈光照太虛、從今互

古不差移、頂閑若安金光眼、天地山河直下居、開神左眼開右眼、開開光點日月排、一年四季竝無災、竝是貴富光明在、天地長生、日月光明、靈丹點眼、神聖光明、照察内外、十方文名<sup>15</sup>、隨叩隨應、永變無停、無災無散、無煞不警、年年守護、歲歲威靈、吾奉／道祖老君、點眼開光、點眼開明、（以下、硃點を置く）開神左化爲日、知天門、開神右化爲月、識地理、開神左耳聽四方、右耳聽人同、開神鼻、知五味、禍消滅、福有餘、開神口、食天祿、庇佑合境皆獲福、開神心、神靈通、未求問、先自光、開左手、爲山河、右手執社稷、孫子貴、財進益、開左脚、踏魁罡、右脚踏家堂、踏人、人長生、踏鬼、鬼滅形、開上頂、透天門、開下頂、閉地戶、留人門、斷鬼路、塞鬼根、剥鬼皮、滅鬼膽、神兵火急如律令（三六九頁）

天色清たり、地色靈たり。皇天に啓告し證盟を作さん。手に兔毛筆を執り、如今開光點眼す。第一左眼の爲めに甕を寫し、右眼に甕を寫す。點ずれば靈光照太虚を照らし、今より古に互るまで差移（＝差錯・過ち、まちがい）あらず。頂閑（間か？）は金光眼を安んずるが若く、天地山河は直下に居る（？）。神の左眼を開き右眼を開く。開開光點（？あるいは「開光點眼」の誤りか）日月排す。一年四季

竝びに災無く、竝びに是れ貴富にして光明在り。天地長生し、日月光明あり。靈丹もて眼を點すれば、神聖なる光明は、内外に照察（明らかに見抜く）し、十方に文名（？）ありて、叩くに隨ひ應ずるに隨ひ、永く變じて停まること無く、災無くして散ずること無く、煞無くして警せず、年守護し、歳歳威靈あり。吾ノ道祖老君を奉じて、眼を點じて開光し、眼を點じて開明す。神の左を開きて化して日と爲せば、天門を知る。神の右を開きて化して月と爲せば、地理を識る。神の左耳を開けば四方を聴き、右耳は人同を（？）聴く。神の鼻を開けば、五味を知り、禍は消滅して、福は餘り有り。神の口を開けば、天禄を食らひ、合境を庇佑して皆福を獲ん。神の心を開けば、神靈通じ、未だ問を求めざるに、先に自ら光あり（？）。左手を開けば、山河と爲り、右手は社稷を執り、孫子は貴く、財は進益す。左脚を開けば、魁罡を踏み、右脚は家堂を踏む。人を踏めば、人長生す。鬼を踏めば、鬼は形を滅す。上頂を開けば、天門に透り、下頂を開けば、地戸を閉ち、人門を留め、鬼路を斷ち、鬼根を塞ぎ、鬼皮を剥ぎ、鬼膽を滅す。神兵火急なること律令の如し。

訓読を試みたが、まだ文意の取れないところがある。今後の課題としたい。以上の呪文に続けて大淵氏は次のような解説を付している。

硃點は兩眼・兩耳・鼻・口・胸・兩手・兩脚・顛（頭のてっぺん）<sup>(16)</sup>に置き、點が終ると、醜主は像を揺すり始める。道士が金古紙を燃して像の前を大きく廻して清める。<sup>(17)</sup>功も同じく金古紙を燃してそれを以て「顯勞」<sup>(18)</sup>と空中に書き、陽日には金字を書いて七順（左から廻す）<sup>(19)</sup>、陰日には水字を書いて五逆（右から廻す）<sup>(20)</sup>にぐるぐる丸を書き、左の呪言を誦する。（三六九頁）

筆者は、像を揺すり、「金古紙」に火を灯したものを像の前で廻すことには、靈魂を呼ぶ意味もあると解する。<sup>(21)</sup>最後に唱える呪文は次の通りである。

吉日開光氣象新、符水靈落救良民、若是乞香、香得勝、若是乞水、水得能、求貴、貴爲天子、求富、富比石崇、求壽、壽比南山、求福、福如東海、田園五穀錢財進、牛羊六畜人口亨、爐下弟子皆清吉、士農工商得清淨、寶鏡團圓甚

分明、照耀神聖顯威靈／神靈速降天尊（三六九頁）

吉日開光すれば氣象新たなり。符水靈落して（？）良民を救はん。是の若くして香を乞はば、香は勝を得ん。是の若くして水を乞はば、水は能を得ん。貴きを求むれば、貴きは天子と爲り、富を求むれば、富は石崇に比し、壽を求むれば、壽は南山に比し、福を求むれば、福は東海の如し。田園には五穀ありて錢財を進め、牛羊六畜ありて人口亨る。爐下の弟子は皆清吉にして、士農工商は清淨を得ん。寶鏡は團圓にして甚だ分明たり。照耀して神聖威靈を顯さん。／神靈速降天尊よ。

これに大淵氏は次のような解説を付している。

此の間醮主は神様と臺とを揺すり續ける。神靈が顯赫するようにする爲という。（三六九頁）

この『開光科儀』によれば、「開光」の手順はおよそ次のようになる。①雞を勅してとさかを切り、筆に血<sup>22</sup>を取る。②筆に人々の気を取る。③鏡に太陽（または月）の光華を取る。④呪文を唱えつつ、鏡をかざし、筆で朱点を打っていく。⑤「金古

紙」三枚を指先に巻くようにして円錐状にしたもの（「紙錢花」）に火を点して大きく廻し、空中に「顯勞」と書き、陽日・陰日に応じて七順か五逆かで円を描く。このとき神像を持っている醮主等は、神像を揺する。

## 二、『開通冥路科儀』、『引魂科儀』その他

『開光科儀』以外については、「開光」の呪文を中心にしてできるだけ簡単に説明したい。

### （一）、『開通冥路科儀』<sup>23</sup>

死者供養の齋儀（功德）では、「開通冥路」の冒頭で主薦の亡者の魂身に対する「開光」が行われる。

道士は朱筆を持ち、出外して、孝男の氣をとり、天に向けて、筆を以て輪を書き、中に點をして天の氣をとり、金古紙を燃して天に向つて廻し清める。その時の呪言は  
天尊說經教 引接于浮生 勤脩學無爲 悟眞道自成 不迷亦不慌 無我亦無名 朗誦罪福句 萬遍心垢清（四七三頁）

天尊は經教を説き、浮生（はかない人生）より引接す。勤脩して無爲を學べば、眞を悟りて道自ら成る。迷はず亦た慌くらからず、我無く亦た名無く、罪福の句を朗誦すること萬遍にして心垢清し。

次が「開光」の呪文である。

續いて魂身の前に來て道士と道友と左の文を二句ずつ交互に念じ、前半では各部に硃を點する。このうち「意」は頭のてっぺんである。後半の「發願上報云々」の時金古紙を燃して「顯勞」と書き、魂身の上を三回廻して淨めて落す。

願眼常觀玉毫光 願耳常聞說法音 願鼻常嗅眾妙香 願舌常讀無上道 願身不染邪淫法 願意常存正信心（以上點）  
發願上報四重恩 發願下濟三塗苦 廣運慈悲憐一切 廣行方便度亡靈 仰惟玉帝大慈悲 嘉護愿心悉成就 志心稽首無上尊 總朝上帝天尊（四七三頁）

願はくは眼の常に玉毫の光を觀んことを。願はくは耳の常に説法の音を聞かんことを。願はくは鼻の常に眾妙の香を嗅がんことを。願はくは舌の常に無上の道を讀せんこと

を。願はくは身の邪淫の法に染まざらんことを。願はくは意の常に正信の心を存せんことを。發願すらく上りて四重の恩に報せんことと。發願すらく下りて三塗の苦より濟はんことと。廣く慈悲を運らして一切を憐み、廣く方便を行ひて亡靈を度せ。仰ぎて玉帝の大慈悲を惟ひ、愿心を嘉護して悉く成就せしめよ。志心もて無上尊に稽首す。總朝上帝天尊よ。

この呪文の「願眼常觀玉毫光」から「嘉護愿心悉成就」までは、『太上元始天尊說寶月光皇后聖母天尊孔雀明王經』（統道藏 SN1433、十三b）、『高上玉皇本行經集註』（統道藏 SN1440、二十八a～b）に「發願」の文として記されている。大淵忍爾氏の録文（大淵前掲一九八三年）中でも、「願眼常觀玉毫光」から「廣行方便度亡靈」までが、『無上煉度宗旨科』（五六四頁）、『太上鴻名靈寶藥師寶懺』（五九九頁）において、「發願」の文として用いられている。元來は發願文であったものと思われるが、眼・耳等について一つ一つ言う内容を有しているの<sup>25</sup>で、「開光」の呪文として用いられるようになったのかも知れない。

(二)、『引魂科儀』<sup>26)</sup>

「引魂」も、死者供養の斎儀（功德）において行われるものであり、副薦等の魂身の「開光」を含んでいる。

開光は開光科を簡単にしたりやり方で、まず硃筆に鶏のとさかを剪刀で切って血を出してつけ、鏡に三台と靈字を書き、鏡を天にかざし、硃筆で天に向けて丸を畫いて點を打って太陽の精氣をとり、鏡を像の方へ向け、魂身の目の他に點ずる。その時の呪言は、

神筆靈々、太陽眞精、點開禁忌、五官齊明、上應天門、下通地戸、左眼看萬里、右眼看分明、左耳聽遠近、右耳知吉凶、鼻中七竅、孔相通、聞吾香煙、降道場（五六六頁）  
神筆靈々たり。太陽の眞精、點じて禁忌を開く。五官は齊明にして、上は天門に應じ、下は地戸に通ず。左眼は看ること萬里にして、右眼は看ること分明たり。左耳は遠近を聽き、右耳は吉凶を知る。鼻中七竅（？）は、孔相ひ通ず。吾が香煙を聞き、道場に降れ。

この呪文は「左眼」「右眼」「左耳」「右耳」「鼻」のみで、口その他に触れていない。「鼻中」に続けて「七竅」（通常は両

耳、両目、鼻の二つの穴、口を指す）とあるのも不審である。

## (三)、神主の開光

死者の安葬（埋葬）に際して、神主（位牌）の「開光」が行われるが、その際に唱える呪文は次の通りである。引用に際しては、大淵氏の説明を一部省略する。

天清清、地靈靈、孔聖文昌筆、指日高昇、點清（茲で筆を天に向ける）、天清、點地（筆を地の方へ向ける）、地靈、點人（孝男<sup>27)</sup>達の方へ向ける）、人長生、點草木（草木の方へ向ける）、草木皆生、點萬物、萬物興旺、點左眼（以下は實際に點を下す）、開、點右眼、開、點兩肩、子兒幾萬千、點爾（耳）、爾聰明、點亡、亡靈早超昇、三魂歸天堂、七魄歸神主（點は以上で終り、以下は點を置かない）、點主子孫興旺、點奉祀子孫代代房房有、朱筆拋上山、子兒大家去做官、朱筆取落斗、子孫千々萬々口、點已完、子孫代代仲狀元。（四七一頁）

天は清清たり、地は靈靈たり。孔聖・文昌の筆あり。日の高く昇るを指して、清（天？）に點ずれば、天は清たり。地に點ずれば、地は靈たり。人に點ずれば、人は長生す。

草木に點ずれば、草木皆生ず。萬物に點ずれば、萬物興旺す。左眼に點ずれば、開き、右眼に點ずれば、開く。兩肩に點ずれば、子兒は幾萬千なり。爾(耳)に點ずれば、備は聰明なり。亡に點ずれば、亡靈は早に超昇し、三魂は天堂に歸し、七魄は神主に歸す。主に點ずれば子孫は興旺し、點じて奉祀すれば子孫代代房房有り。朱筆山に抛上すれば、子兒大家は去りて官と做り、朱筆斗に収落すれば、子孫千々萬々口ならん。點ずること已に完りぬ。子孫代代狀元に中たらん。

大淵氏の解説には、図を掲げて点を打つ位置を示しているが、ここでは省略する。

(四)、打城における替身等の開光(『無上九幽打城拔度科儀』) 死者供養の斎儀(功德)で行われる「打城」の初めにも、死者を象った「替身」や「観音」「獄卒」等の「開光」が行われる。これについて大淵氏の解説を引用する。

大鼓と銅鑼の中を道士は龍角を鳴らし、劍を浄水で浄め、雞のとさかを切つて血を出し、その血を筆につけ、枉死城

の神々と城の中の亡者像(替身<sup>30</sup>)とを開光する。なお替身の開光の際は三魂七魄の名を呼ぶ。ついで金古紙に火をつけ、龍角を鳴らして金古紙を持つて城の上を三回廻して浄める。(五〇二頁)

ここには「開光」に用いる呪文は掲載されていない。しかし、「替身」の「開光」に「三魂七魄の名を呼ぶ」とあるのは、注意される。『雲笈七籤』(道藏S.N.1032)卷五十四によつて「三魂七魄」の名を挙げると、「三魂」は「胎光」「爽靈」「幽精」、「七魄」は「尸狗」「伏矢」「雀陰」「吞賊」「非毒」「除穢」「臭肺」となる。台南でもこれと同じ名が用いられている。

### 三、開光と靈魂(神靈・亡魂)を入れること

『開光科儀』では「兩眼・兩耳・鼻・口・胸・兩手・兩脚・頭」に朱で点を打つ。『開通冥路科儀』では「眼・耳・鼻・舌・身・意(頭のとっぺん)」に朱で点を打つ。『引魂科儀』では「目その他」とあるが、呪文によつて「左眼・右眼・左耳・右耳・鼻」に点を打つことがわかる。打城の「開光」においても『開光科儀』『開通冥路科儀』等と同様に体の各部に朱で点を打

つ。そうすることで、眼や耳や鼻などが開くのである。「神主」の「開光」に際しても、呪文の上では、人の体と同じように「兩眼・兩肩・耳」に点を置くことになっているのは興味深い。

まずは、これで神像や魂身等に靈魂が入ったことになるのであるが、そのように単純に考えることはできないようである。こうした「開光」の儀礼で靈魂が入ったのであれば、靈魂は身体各部分に宿るようなものと考えられることになるが、そのように考えられているのではないと思われる。「開光」の後に、また靈魂を招くことが行われるのである。

たとえば、規模の大きな祈安醮に付加して行われる「火醮」の最初に火王の「開光」（「開光科儀」）が行われるが、「開光」の後、啓白を行って神々を迎えている。拔度儀礼の場合、「引魂」や「開通冥路」に際して魂身の「開光」が行われるが、「引魂」の場合には、「開光」の後で「魂を集めて引魂」している。「開通冥路」でも、「開光」した後、冥路を開通させて冥界から亡魂を壇に導いている。

このように、「開光点眼」した後に、改めて神霊を迎えたり、亡魂を招いたりしているのであるから、「開光」することによって、直ちに靈魂が宿ったとは考えていないように思われ

る。

それでは、「開光」では何をしているのだろうか。一つの可能な解釈は次のようなものとなるだろう。すなわち、「開光」は、単なる物体である像・人形を、靈魂が宿ることができる（憑依できる）ものに変容している」というものである。そうであるとするれば、「開光」は「招魂（召魂）」の準備として行われていると理解できる。そうした理解に基づけば、「開光点眼」は、《眼・耳・鼻・口等》に生氣（生命力）を与えて開いているのであり、靈魂を入れてのではない」とことになる。死者に対して行う「招魂（召魂）」が、「遺体」に靈魂を戻そうとするのではなく、代わりの物（人形等）に憑依させる時には、こうした「開光」が必要だったのではないかと考えられる。

『開光科儀』を紹介した箇所の最後に①から⑤としてその手順を整理したが、ここで生氣（生命力）を与えて身体各部分を開いている（正しく働くようにさせている）という解釈に基づいて、整理しなおすと次のようになる。①②③では、筆と鏡に生氣（生命力）をこめている。④では、筆と鏡にこめられた生氣（生命力）を、神像に移している。⑤では火と振動による呪的行為が行われているが、大淵氏の説明では、火は清めであ

り、振動は神威を明らかにすることであるとされているが、これも筆者は「招魂」の呪術的行為であると解する。<sup>(36)</sup>

一応以上のように考えることができるが、身体の部分に靈魂が宿るといふ考え方も存在する。次にはそれを見ていきたい。

#### 四、身体の部分に宿る靈魂

##### (一)、ヤオ族の「脱童歌」

漢字で記された資料で、「眼・耳・鼻・口等」の靈魂を考えていると思われる資料がある。ヤオ族(ユーミン)の「脱童歌」である。廣田律子氏が紹介している資料を引用する(引用に際して字体を一部改めたところがある)。

##### 「脱童歌」の一部

祖師父 祖師父 備把三魂還我身／備把头魂交付我 師郎  
頭上自興旺／備把耳魂交付我 聽聞九州鑼鼓聲／備把眼魂  
交付我 眼活便是北斗星／備把鼻魂交付我 師郎鼻内聽聞  
香／備把口魂交付我 師郎口内說文章／備把手魂交付我  
師郎起手便成文／備把胫魂交付我 師郎肚内甚聰明／備把  
脚魂交付我 師郎脚下便成罡／頭上三魂頭上立 脚下三魂

##### 脚下藏 (五八三頁)<sup>(39)</sup>

祖師よ祖師よ、三魂を私の身に戻して下さい。頭の魂を私に返してくれば、私の頭の上に生命力が起こります。耳の魂を私に返してくれば、九州のドラの音も聞こえます。眼の魂を私に返してくれば、北斗星のように輝きます。鼻の魂を私に返してくれば、香りを嗅げます。口の魂を私に返してくれば、文を唱えることができます。手の魂を私に返してくれば、文を書くことができます。お腹の魂を私に返してくれば、腹の中がすつきりします。足の魂を私に返してくれば、罡歩ができます。頭上に三魂が立ち、足元に三魂がしまわれます。(三五六頁)

ヤオ族の宗教は、漢族の道教を巧みに取り込んで、独自の宗教体系を成立させているものであり、漢字で書かれた儀礼文献を使用している。ここに示した「脱童歌」が、漢族から受容してそのまま伝えたものなのか、ヤオ族が受容したのちにヤオ族において独自に成立したものなのかは、分からない。しかし、ここには明らかに身体の部分に宿る靈魂という考え方を捉取ることができる。ここで、「三魂」と言いながら、「頭魂」「耳魂」「眼魂」「鼻魂」「口魂」「手魂」「胫(肚)魂」「脚魂」と八

種の魂を挙げて注意される。「三魂」といふ觀念に収まらない魂のイメージが現れているのである。

## (二)、台南道教の「十王寶懺」と「仙鶴符命」

台南地区の道教儀礼ではどうか。「打城」の「替身」の「開光」に際して三魂七魄の名を呼ぶというのは、「開光」において靈魂を呼ぶという考え方が明確に現れていて注意されるが、三魂七魄<sup>40</sup>は、魂魄に関する定型的な表現であり、「開光」において離散した靈魂をすべて集めようという欲求は現れているが、その個々の魂魄についての身体とのかかわりは不明確であるように思われる。三魂七魄と言った時には、身体部分とかわらせるような思考は働いていないように思われる。ヤオ族の「脱童歌」で、「三魂」と言いながら八種の魂を挙げているのも同様で、「三魂」というのが定型的な表現であり、そこで具体的に働いているイメージとは乖離したものであるように思われるのである。しかし、「打城」の「替身」の「開光」において、魂魄の名を呼んで招くという一種の「招魂」儀礼が行われているというのは、「開光」儀礼を考える上で重要な事柄である。やはり「開光」は、基本的には一種の「招魂」儀礼なのである。

しかし、小稿で取り上げた台南の儀礼では、身体部分にかわる靈魂を呼ぶという内容はとらえられないことは確かである。そうではあるけれども、少し範囲を広げて見ると、ヤオ族の「脱童歌」ほど明確ではないが、身体部分を取り戻すというモチーフを含んだ儀礼が存在する。『太上靈寶冥王拔罪寶懺(十王寶懺)』十卷(大淵前掲一九八三年、五七八―五九三頁)の説誦に際しては、一卷を読み終えることに「靈寶无量度人眞符(仙鶴符命)」(大淵前掲、一九八三年、六六五頁)を一道ずつ発するが、この「仙鶴符命」に身体部分を取り戻すような内容が含まれてくるのである。「仙鶴符命」については、大淵氏は次のように解説している。

十仙鶴。鶴には仙人(十仙人。八仙と西宮王母と仙翁といふ)が乗り、靈寶无量度人眞符(東方拔度眞符以下十眞符。文檢(34)<sup>41</sup>)を持たせる(實際は貼りつける)。符には文章が附いて符命の形式となっていて、主行科事が天師の命を承けて出す。東方以下十方無極世界の冥官に亡者の拔出を命ずるものである。宛名はその方を統轄する天尊と救苦天尊とになって居るが、十方の天尊は實は救苦天尊の化身であるという。(五七八頁)

この「靈寶无量度人眞符」の内、東方は耳（「聾病耳皆開聡」、東南方は目（「盲者目明」、南方は口（「瘖者能言」、西方は足（「跛痾積逮、皆起能行」、西北方は髪と齒に関するもの（「髮白反黒、齒落更生」となっている（五七八～五七九頁）。これらは『度人経』の次のような経文に基づいている。

説經一遍、諸天大聖、同時稱善、是時一國、男女聾病、耳皆開聡、説經二遍、盲者目明、説經三遍、瘖者能言、説經四遍、跛痾積逮、皆能起行、（中略）説經六遍、髮白反黒、齒落更生（經を説くこと一遍にして、諸天の大聖は、同時に善きかなと稱し、是の時一國の男女の聾病なるもの、耳皆開聡し、經を説くこと二遍にして、盲者は目明かとなり、經を説くこと三遍にして、瘖者は能く言ひ、經を説くこと四遍にして、跛痾積逮は、皆能く起ちて行き、（中略）經を説くこと六遍にして、髮の白きは黒きに反り、齒の落ちたるは更めて生ず。）（『元始无量度人上品妙經四注』道藏S1N87卷一、六b～八a）

この経文によって、十方の内の五方が身体の部分的機能にか

かわる内容になったとも言えるが、十方の冥官に亡魂を釈放するように命じる命令書の内容に、身体の部分を回復させることが特記されていることは、注意される。

### 小結

この後、道教における身体に宿る神や、道士が受録に際して身体に宿らせる神等について検討したいと考えていたが、紙幅の都合もあり、ここで論を切り上げざるを得ない。そうした検討をした上で、小稿で論じたいと思っていたのは、以下のような事柄である。

まず、身体の各部分を働かせ、力を与えるような存在が考えられており、これは生氣、靈魂、神等と表象される。つまり、それは、生氣から靈魂、神までの幅を持ったイメージにおいてとらえられている身体の部分機能をさせる何らかの存在であり、これが精神的・人格的なものとしてとらえられる靈魂とは別に考えられている。これをここでは、身体の部分にかかわるという特徴から、「部分」的靈魂と呼んでみたい。こなれない表現であるが、肉体とは別に肉体を働かせるような存在であるので、広い意味での「靈魂」の範疇に入ると考え、身体「部

分」に特にかかわる「靈魂」としてとらえておきたい。それと別に存在するのが精神的・人格的靈魂である。これが通常考えられる靈魂である。もちろん世界各地に複数の性格の異なる靈魂の存在を考える考え方があり、「部分」的な靈魂のような存在を考えるのも珍しいことではない。ここでこうしたことを述べるのは、道教の儀礼を考える上で、必要な整理をし直しただけのことである。

「開光」について言えば、「開光」で行っているのは、この「部分」的靈魂に対する招魂であるといえる。多くの場合、これに続けて行われる精神的・人格的（ないしは神格的）靈魂の招魂と相まって、神像や魂身等に完全に靈魂が宿ることになる。

藤野岩友氏の「招魂歌」の類型<sup>12</sup>から見ると、「部分」的靈魂に対する招魂では、C類（舞い戻り型）の特徴がとらえられるのではないかと思われる。それは、魂の行き先（あるいは元いた場所）に触れず、戻るべき（あるいは宿るべき）身体的部位のみを言うのである。「開光」の呪文では、点ずる場所と点じた後にその結果としてどのような働きをするかを述べている。「開光」の場合、生氣（生命力）を注入するような方式であるので、これを「招魂歌」の類型と関係付けてよいかどうか少々

迷うところであるが、「部分」的な靈魂の宿るべきところを言うのみである点は、C類の変形と見てよい特徴が認められる。

「部分」的靈魂の場合は、人格性や精神性が希薄なので、ただ戻るべき（あるいは宿るべき）ところを言い、どういう働きをするはずであるのかを言うだけなのであろう。

ヤオ族の「脱童歌」の場合は、「祖師」の力によって連れ戻すように願う内容であるが、やはり各部位の魂を言って、それが戻ってきたときの働きを言うだけであり、基本的には「開光」の呪文と同じ発想であると言える。

そして、「開光」儀によって「部分」的靈魂を付け、表象レベルでの身体の基本機能を付与した上で、精神的・人格的靈魂を憑依させるという手順が確認できるならば、道教儀礼（たとえば南宋期の黄籙齋）において、亡魂の救済過程で、「召魂」してから、「沐浴」し、「全形儀」<sup>13</sup>等を行って身体の完全性を取り戻してから、「煉度」の過程に乗せていく方式とかかわらせて、「招魂」の過程に見られる種の類型的思考をとらえられるのではないかと考える。すなわち、靈魂を招く際には、憑依させるべき身体の（表象レベルの）完全性が問題となり、その完全性を与えないしは取り戻すことが、精神的・人格的靈魂の「招魂」の前後に付きまとうのではないか

と思われるのである。身体の完全性の回復ないしは獲得と精神的・人(神)格的靈魂の招魂については、さらに「内在魂」的靈魂の招魂と「外来魂」的靈魂の招魂の問題がかかわってくると思われるが、これについては機会を改めて論じたいと思う。

注

- (1) 『佛説一切如来安像三昧儀軌經』に「復爲佛像、開眼之光明、如點眼相似。」(大正藏卷二十一No.148)とある。「光」は「眼の光明」の意である。この經には、「開眼」のための呪文も含まれている。
  - (2) 李猷璋「台湾福佬人における神像彫塑の儀礼―開斧から開光まで―」『民族学研究』第三十卷第三号、一九六五年参照。また、黄強「中国の祭祀儀礼と信仰」上巻、第一書房、一九九八年、第五章「民間の祭祀儀礼における神靈の依り憑く物と古代の『主』」の「開光」の儀式について(二七八―二九一頁)参照。
  - (3) 天師道(正一派)の道士であり、「靈宝派」、「靈宝道壇」等の名称も用いられる。台湾の福建(泉州・漳州)系の漢族社会で、「拔度齋事」と「吉慶醮事」をともにに行っている。
  - (4) 一九二七年生まれ。残念ながら二〇一四年に亡くなった。
  - (5) 大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼 仏教 道教 民間信仰』福武書店、一九八三年。この「第二篇道教儀礼」の部分を抜き出して再刊したのが、大淵忍爾『中国人の宗教儀礼 道教篇』風響社、二〇〇五年である。
  - (6) 死者供養の齋儀において、主として救済の対象とする亡者を「主薦」とする(依頼者が、亡くなった親のために行う齋儀であれば、その親が「主薦」となる)。その他に、すでに亡くなってから時間の経過している亡者(血縁者)を加えて、救済の対象とすることがある。そう
- (7) した亡者を「副薦」「附薦」等と称する。
  - (8) 『』は原文における改行を示す。以下も同じ。
  - (9) どこまでも明らかに顧みる意。
  - (10) 道士が儀礼に用いる「七星劍」。
  - (11) 道士が依頼者にあるが、筆にあらかじめ朱墨を含ませておいてから、血をつけることも多い。また、血をつけてから、さらに朱墨を含ませるような場合もある。
  - (12) 壇内(醮の場合は多くは廟の中)で儀礼を行っている場合は、壇の外に出る。
  - (13) 道士が依頼者に渡す「要用物品單」(必要な品物のリスト)には「新鏡」「開光新鏡」のように記されている。拙稿「道教の祭りと供物―現代台湾南部の事例から―」、國學院大學日本文化研究所編『東アジアにみる食とこころ―中国・台湾・モンゴル・韓国・日本―』おうふう、二〇〇四年参照。
  - (14) 竹の繊維で作った黄色い長方形の紙。簡単な符を書く場合にも用いる。火醮を例にして説明を補足する。建醮の際には初めに火醮を行うことが多いが、その場合には「火部啓白」とともに「開光」が行われる。神像は糊紙製(竹・紙などで作ったもの)に向って並んで立ち、三清壇(壇の正面に三清の掛軸をかけて設ける)に向って並んで立ち、その代表者が、火王(赤明和陽大帝、南方火炁尊帝、火祖燧人帝君、火鬼、火獣の像を分担して持つことになる。拙著「台湾における道教儀礼の研究」笠間書院、二〇〇五年、一六七―一七三頁参照)あるいは「分明」の誤りなのかも知れない。そうだとすれば「十方に分明たり」と読める。
  - (15) あるいは「分明」の誤りなのかも知れない。そうだとすれば「十方に分明たり」と読める。
  - (16) 筆者の観察した事例では、多くの場合これに加えて背中に点を置くことが多い。
  - (17) 高功法師。中心となって儀礼を行う道士のこと。
  - (18) 「顯勞」の意味は未詳。神像に対して「はたらきをあらわせ」と命じ

- る意か。
- (19) 時計回り。大淵前掲一九八三年、二一五―二一六頁参照。
- (20) 反時計回り。大淵前掲一九八三年、二一五―二一六頁参照。
- (21) 李献璋氏は、新たに作った神像の「開眼」の際に「仏師が金紙に火をつけたのを手に持って、像の前面で振りながら咒文を唱えて関〔Kuan〕」（神を廻りつかせる咒術）をする」ことを報告している（李前掲一九六五年、二五六頁）。李氏の報告にある「関」と、「開光」に際して火をつけた「金古紙」を像の前で廻す行為は、基本的に同じ呪術的な所作なのではないかと思われる。また、黄強氏も「開光」における火の力に注目している（黄前掲一九九八年、二八三―二八七頁）。
- (22) 「血」の使用については、中国古代の「鬻禮」が想起される。齋伯守照「鬻禮とその宗教的意義」『民族學研究』第二卷第四号、一九三六年参照。齋伯守氏は、鄭玄の「周禮」春官・龜人等の注にある「之を神にするなり」という注を「最もよく其の宗教的意義を説明」するものであるとした上で、「鬻禮」の目的を「器物を神聖にすること」とし、その方法としては「牲血が絶対に必要視された（八三頁）とする。そして「血が生命の原力であり随つて威力あるもの」とされてゐたことは古代に於ける通念であつた。かゝる威力あるものとしての血を器物に塗ることにより、絶大な威力を附與させやうとしたのが即ち鬻禮の目的であり且つ宗教的意義であつた」（八三―八四頁）とする。
- 「開光」に用いる血も「鬻禮」における血と同様に「威力」の附与という観点から理解することができる。黄強氏も「開光」に関して血の信仰を取り上げ、「鬻」について論及している（黄一九九八年、二七八―二八三頁）。
- (23) 「無上拔度路關科儀」（大淵前掲一九八三年、六一〇―六一三頁）も同趣旨の儀礼であり、その初めに魂身の開光を行うことがある。
- (24) 以下にあげる統道藏の二つのテキストでは「加」に作る。
- (25) 「無上煉度宗旨科」も『太上鴻名靈寶樂師寶儀』もともに煉度系の儀礼であり、身体を表象レベルで完全に於て救済するというモチーフを持つている。「發願」の文として用いられているが、これらの儀礼では、身体の完全性にかかわる呪文としての性格も認められるのではないかと思われる。
- (26) 大淵前掲一九八三年では「新亡者の功德に併せて古い亡者の功德を行う場合の豫修の科儀」（五六六頁）と説明している。
- (27) 「孝男」は「はしくなつた人の息子をいう」。
- (28) 原文は「仲」。文意が通らないので「中」に改めて読んでおく。
- (29) 高さ約一メートル、幅と奥行きが約四十五センチメートルの竹と紙で作られたもので、これによって地獄の門を表す。中央奥の位置に観音、正面の門の両側に獄卒、城の中に死者を象つた「替身」が作られる。観音や「替身」は、竹の棒に紙を貼り付けたもの、獄卒はただ紙を切つて貼り付けたものである。
- (30) 大淵氏の解説には、「前面の上部の両側に牛將軍と馬將軍、下の方には獄卒達、上部後面の中央に観音大士、両側に城隍神と土地公、城の中に亡者像（替身）仮の亡者像」を作る」（五〇二頁）とある。
- (31) 実際の儀礼では、科儀の違いによって方式が異なるのではなく、儀礼を担当した道士によって点を打つ位置等に若干の違いが出てくるようである。
- (32) 大淵前掲一九八三年、五六七頁。
- (33) ただし召魂は繰り返され、この時点で亡魂が完全に魂身に宿つたとはいい難い。たとえば、「打城」という科目は、地獄の門を破つて亡魂を救い出すという科目であり、召魂の要素を持つている。この時点で亡魂が地獄から解放されたのなら、それ以前には、亡魂は地獄で拘束されてたことになり、魂身には宿つていなかったとも考えられる。亡魂がどこに居るのかという事は、こうした儀礼では単純に割り切つて考えることはできないように思われる。
- (34) 李献璋氏の報告（李前掲一九六五年）でも、すでに引用した「関」の

儀礼だけでなく、「開眼」の前後に行われる神像に靈魂を入れる儀礼を挙げている。李氏は、廟等に祭る神像の製作の始めから完成に至る過程で行われる儀礼を「1、開斧」「2、入神」「3、開眼」「4、過火（火渡り）」の四つに整理して記述している。このうち「2、入神」では、彫り上げられた神像の背中に穴を開けて、「蜂」「釣魚翁（かかせみ）」「田蛤仔（蛙）」等をつめこむ例を挙げている（二五八頁）。これも靈魂を神像に込める呪術である。これを行った後、裝飾を済ませると「3、開眼」が行われる。李氏は「開眼」について「点眼と開光の両方を含む」としており、「点眼」と「開光」を区別してとらえている。仏師や紅頭法師の行う事例をいくつ挙げておられるが、その中には山の上や海辺に赴いて「開眼」行うという習俗も示されており、興味深い（二五八―二六八頁）。「開眼」に続いて多くの場合「関」が行われるのは、すでに引用した通りである。

(35) 李献璋氏の報告（李前掲一九六五年）にあった「入神」「開眼」も像に生氣（生命力）を入れる呪術ではないかと思われる。

(36) 李献璋氏の報告（李前掲一九六五年）にあった「関」がこれにあたり、新しく作った神像の場合は、このあと「過火」をして廟の神座に据えることになる（二六〇頁）。台南の道教儀礼における「開光」の場合は、像の前で火を廻して「開光」の一連の儀礼を終えた後、神像や亡魂等を招くことが行われることになる。おそらく火による招魂で像としての完成を見たことになるのであろうが、醮や齋の儀礼の文脈では、その後には神像や亡魂を招く手順になるのであろう。醮や齋の儀礼の文脈で考えた場合は、火を廻して行う招魂では完全に神像や亡魂が憑依したとしないのであろう。

(37) 廣田律子「中国民間祭祀芸能の研究」風響社、二〇一一年。

(38) 「肚」は腋の下の意であるが、下句からして「肚」の誤りであろう。廣田氏も後引の訳の中で「腹」と訳している。

(39) この「脱童歌」は、中国湖南省藍山縣で用いられているテキストによ

るものである。

(40) 三魂七魄については、藤野岩友『雲笈七籤』に見える三魂七魄「中国の文学と礼俗」角川書店、一九七六年参照。

(41) 「文検」は、「儀礼において神々や死者の靈魂にあてて発出される諸文書の範例集である」（丸山宏『道教儀礼文書の歴史的研究』汲古書院、二〇〇四年、一〇頁）。大淵前掲一九八三年、六六五頁に「十仙符式」が掲出されているが、ここでは省略する。

(42) 藤野岩友『巫系文字論』（一九五一年、増補版一九六九年、大學書房）二一五―二三三頁、藤野岩友『楚辭』（漢詩大系三、一九六三年、集英社。漢詩選三として一九九六年再刊、一三頁参照。招魂歌の類型は、藤野氏（前掲一九六三年）によれば、以下の通りである。「招魂歌に三類ある。A類（蚩眼型）、わが国に普及している蚩狩りの唄、『あつちの水は苦いぞ、こつちの水は甘いぞ。蚩来い』と同じ形式のもので、魂を嚇して遠方に離散するのを防ぎ、一方ではこれを誘うて身内に帰り鎮まるように、魂に呼びかけるのである。B類（大掃除型）、遊離した魂のいそぎなどを幾箇所も想定して、そこに呼びかけて魂を誘いだし、身内に帰り鎮めるために歌う。C類（舞い戻り型）、魂の戻るべきところをいうだけで、魂の行き先には触れない」（一三頁）。筆者はこれにさらに一項を増し、「連れ戻し型（あるいは強制連行型）」というようなものを加えてはどうかと思っている。元帥神や童子等を派遣して魂を捕まえてくるというものがある。これは道教や法教等の儀礼で用いられるものである。これを仮にD類とすれば、A類からC類までは魂に直接的に呼びかけ、働きかける点に特徴が認められるが、D類は、魂を捕らえに行く神や童子を呼び出し命ずることが内容的な特徴となる。命ずる内容には赴くべき場所も指示されるので、B類（大掃除型）と類似した内容も見られる。これについては、改めて論じたい。

(43) 前注で触れた「連れ戻し型」にあたるが、詳しくは稿を改めて論じた

(44) 符や呪文等を使って身体の欠損を補う儀礼。天医と呼ばれる天上界の  
い。  
医者が呼び出され、戦争や災害で損なわれた死者の身体を、たとえば  
手のないものは手を補い、頭のないものは頭を補うというようなこと  
を行う。これを経なければ、仙人の身体に変容させる「煉度」の技法  
による救済の過程に進めないのである。